

伊藤二子と八戸

2011年5月3日（火） 14:00 - 15:30

アーティストトーク

造形家・伊藤二子

（聞き手・青森県立美術館学芸主査 高橋しげみ）

高橋：本日は貴重なお休みの時間を展覧会にお越しくださり、大変ありがとうございます。私は『伊藤二子と八戸展』の担当をいたしました青森県立美術館の学芸員の高橋と申します。今日は作家の伊藤二子さんをお招きし、制作のことなど詳しくお話いただきたいと思います。

最初に、私の方から伊藤二子（いとう・つぎこ）さんについての簡単なご紹介と、今回の展示構成について少しご説明させていただきたいと思います。伊藤二子さんは1926年、大正15年、八戸市にお生まれになりまして、八戸市で長年暮らしてきた造形家です。現在85歳でいらっしゃいます。伊藤二子さんのおじい様が伊藤吉太郎さんという方で、現在は伊吉書院という看板で書店を営んでおりますお店の、前身となります伊吉商店を創業された方でしたが、二子さんはお母様が離縁されている関係で、お母様のご実家でありますその伊藤吉太郎宅でお生まれになり、そこで少女時代をお過ごしになりました。

その後、太平洋戦争の体験を挟みまして、戦後には八戸市立小中野小学校の教員を8年間勤めております。その教員時代に宇山博明（うやま・ひろあき）さんという、この方もまた八戸市を拠点に活躍した方で、書家・造形家で八戸の文化を語る上では重要な存在ではありますが、宇山博明さんとの出会いがあり、宇山さんとの交流から、本格的に絵を描き始めるようになります。それ以降は画壇に所属することはなく、一貫してキャンバスにナイフを用いた独自のスタイルで画業を続けてきました。1972年に初個展を開催した後は、毎年のように新作を発表して、現在も精力的な活動を続けております。今回は青森市での初めての大きな個展ということになります。1970年代以降現在に至るまでの作品の中から75点ほどを選び出して会場内に展示をしております。私が初めて伊藤二子さんの作品を拝見したのは、伊藤さんが『I CAN OF（イカノフ）』という八戸の市民アートサポートチームの展覧会に参加するようになった2007年の頃のことです。ですから、彼女の長い画業からしてみると、表層をなぞるくらいしか見てきていないのですけれども、やはり初めて伊藤さんの作品に出会ったときの衝撃というのは、かなり強烈なものがございました。野生というか、荒々しさとともに高潔さがあるという、2つの相対するものが1つのキャンバスの中に共存している、そういう印象を受けました。これは絵を「描（えが）く」という生易しいものではなくて、キャンバスの上での格闘を重ねてきているそんな方なのだという強い印象を持ちました。彼女が絵具を塗る際に筆ではなくてナイフを用いる、それも巨大な特注のナイフですけれども、そのナイフを用いるという話もうかがっていたので、特にそういう印象を持ったのだと思います。今回のタイトルをつけるにあたっては、絵かきは絵かきでも、「か」という字は、体を「掻く」とか「掻きわける」の掻くですね、ナイフでキャンバスの上を掻く。あるいは既存の「絵」という言葉によって一般の人が想像するようなイメージをあえて「欠いて」いく、ナイフで立ち向かっていくという、そういう意味での「欠く」という意味を込めて「絵かき」という・・・「カ」というには時代の荒波を「カ」きわけるとか、生みの苦しみとしてのあ「ガ」きであるとか、己のエゴを掻き消

掻き消すの「カ」きでもあり、いろんな意味も込めて今回は『半世紀の絵カキ』というタイトルをつけさせていただきました。今皆さんがいらっしゃるギャラリーから、この隣のギャラリーに至るまで1970年代からの作品を展示しているのですけれども、70年代の作品というのは実際には1点しかございません。入口のところに展示しております赤い地に黒で円状のものを描いた小さな作品が1点だけで、後は90年代に入ってから現在に至るまでの作品となっております。現存しているのにあえて外したというのではなくて、本当に残っていないんですね。伊藤さんの中では作品を残すという意識はある時期まで皆無であったようです。そのことは今後、これからのお話の中で詳しくお聞きしたいと思います。ギャラリーBという真ん中の小さなお部屋には、伊藤さんが描いた作品というのではなく彼女が所蔵している物、あるいは伊藤さんのご家族が所蔵している物を集めた資料展示をしております。伊藤二子さんは大正15年、大正の末期にお生まれになって現在に至るまで、激動の時代を生きてきた方でいらっしゃいまして、今回伊藤さんからさまざまなお話をうかがいながら、彼女の人生を辿ることが八戸の歴史の歩みを辿ることにほかならない、という思いを強くしまして、そのことを少しでも形にするために、ギャラリーBには資料を展示して、八戸の歴史の重要な一面を展覧するような形にしております。伊藤さんにお話をうかがっていきたく思いますけれども、今回の展覧会というのは、新作を中心に発表してきた今までの展覧会とは異なりまして、過去の作品が一堂に会する回顧展のような形になっています。数日前に、どういう感想をお持ちですかということをお聞きしましたら、「こんなもんか、って感じです。」と。それほど強い想いっていいのではない、新しい発見みたいなものも特にあるわけではない、というようなことをお答えしていたように思いますが、そのあたりあらためてどうでしょうか？今回の展示をご覧になって。

伊藤：私は作品そのものは、本当に1点1点訣別してきたつもりでおります。訣別して、訣別する以外に先はないという立場で描いてまいりましたので、それをこういう形で陳列してくださったということは、望外の幸せです。で、幸せということは、100%幸せなわけじゃなくて、ほんとにこんなものしかできていなかったのかしら？これでいいのかしら？しげみさん恥をかっていらっしゃるんじゃないかと思うくらい、なんだか申し訳ない気持ちでいます。これがもっと、ああ～幸せって、もっと幸せが溢れるような、作品に対する思い入れがあるならば、どうだったのでしょうか。私は1つ1つは、ああ～こういうこともできていたのかしら？こういうことしかできなかったのかしら？っていう立場でしか見ていません。温かくなって幸せということがないのです。訣別せずにここにあったということ、むしろ恥じるくらいの気持ちでいます。それを皆さんが喜んで・・・喜んでらっしゃらないかもしれないけれども、喜んで見てくださるとするならば、描いた私を離れてしまった作品が、高橋しげみさんのお気持ちでこういう場所をいただいたということの幸せにつきますと思います。作品の持つ力ではなくて並べてくださった、こういうチャンスをごくださった方の、その方のおかげでこの展覧会があるということです。そうじゃなければ、懐古して幸せで思い出でに浸るということ、拒否する場所では私の表現の場所はないと思ってきました。そういうことですので、作品そのものにはほんとのこと言って、懐かしいとかそういうことないんです。そんなことしかないんですが・・・

高橋：まさに今おっしゃってくださったことが、伊藤二子さんの制作の姿勢を端的に語っていると思いますけれども、1970年代の唯一残る作品に関しても、伊藤さんが持っていたわけではなくて伊藤さんが開業し、お勤めになっていた民芸店「ののや」さんの倉庫に・・・

伊藤：倉庫に・・・偶然。

高橋：偶然、たまたま、あった

伊藤：捨て忘れていた、1点ということです。

高橋：我々にしてみれば幸運にも残っていたその1点だったわけです。結局80年代の作品については、皆無ですよ？

伊藤：はい。

高橋：後90年代に入ってからポツポツと残り始めているという感じで。そういう作品の残存の仕方は、彼女の1点をつくる時の姿勢にもそのまま通じることで、昨日描いた形にはまったく執着せずに、今日見るとまた違う色に塗り込められていて、毎日毎日作品が変わっていく、そういう制作の仕方ですよ。

伊藤：初日にご覧になった方は、あれはどこへいったの？というふうに全然陰も形もなくなっています。

ということは、描いていて思ったことは、描いている姿を公開しているのではなくて、作品が出来ない姿をご覧いただくことになっているのだと思います。出来ない、出来ない、出来ないというところから、ぽっかり生まれる幸運を待つしかないのです。そして、もしも出来たとするならば、出来たという錯覚でしかないような気がします。その出来たという錯覚に縋りつくところには、私の作品はあってはならないと思っています。常に捨てて・・・常に捨てて、捨てて、捨てて、捨てた挙句にやっと生まれる。なにかをちょっと、ちょっと手がかりによじ登って、作品だと思うところに作品はないと思っています。長い10mのキャンバスを用意していただきました。最初っから私はそのことを忘れて、なんとなく描けるような気がしていたんです。最初の日、描き終わったその作品たるや無残なものでした。とてもとてもこれは、作品と言えるものではないと思って。ぜーんぶ消しました。そしてまた新しく描いています。ところが描けないのです。描けないというのが、私の作品の原点ではないのか、描けるところには私の作品はなくて描けないということをお目にかかるこの切なさこそが私の作品の原点ではないのか、そういうふうに29、30、1、2、3、五日目にしてやっと悟りました。そういう切ない瀬戸際に立って塗っているだけです。描こうと思ったって描けるものじゃない。いろいろ条件も確かに異なります。どんな条件であろうと、昨日の条件で成功したことを今日繰り返したのでは、作品ではありえないから、いろんな条件の中で生きる道を探していくのだと。14日までお邪魔することになってますが、それまでになんとか生き延びて繋がって描けたらなと・・・もっと絶望が深まらなければ、本当の作品は生まれてこないんじゃないかと。まだ絶望のぜの字にもなっていない。そういう甘っちょろいところにしかない、そういう私をご覧ください。恥ずかしい極みです。

高橋：ちょっとご説明が遅れてしまったのですが、こことちょうど小さい部屋を挟んだ反対側にブルーシートを敷きつめた公開制作の場を用意しておりまして、今回この企画を行うにあたっては、これまでの作品をなるべくたくさん展示させていただくということもありましたが、それと合せて伊藤さんに提案させていただいたのは、今までにない大きな作品を作りませんか？ということでした。伊藤さんは、ご自宅兼アトリエの中で

いつも制作をされているんですが、決して広大なお屋敷とはいえない（笑）居間の一角で、キャンバスを何枚か広げて制作している・・・いつもはそういう制作のスタイルですが、もしかしてもっと大きいスペースがあったら、とか、例えばキャンバスを切りまわす時とか運ぶ時に手伝う人手があれば、もっと大きな作品とか、もっと違う形に発展できるかなと思ひまして、そういう提案を僭越ながら、いたしました。そしたら、伊藤さんの方から「1度やりたかったんですが、ロールのキャンバス1本に描いてみたいんです。」というお話をいただきまして、じゃあそれやりましょうよ。という話で今回の試みに至りました。で、「人前で制作することは大丈夫ですか？」とお伺いしたら、「まったく気にしません。」と（笑）、「無視するとき私無視しますから。」「お客様からお声をかけていただいたことが、自分にとって次につながることもあるので、それはまったく問題ないです。」という話だったので、今回ああいった試みをしているんですが、今伊藤さんが「条件がちょっと違う」とおっしゃったのは、いつもは木枠に張られたキャンバスの上にナイフをこう滑らせて描いてますが、今回床に直においたキャンバスで、張られてないもので、抵抗感がまったく違うらしいんですね。それで、どうしようか、と、木枠に張ったらいいかとか、今は段ボールの下地を敷いてその上で書いてもらったり、なんかもうちょっとキャンバスを張る方法はないかというのは考えていますけれども、それでも伊藤さんはこの環境でなんとかやってみるというような感じでお話を・・・今の段階ではお話しして下さっているので、それで進めているような状況です。線の出方とか、キャンバスを張った時とは、ずいぶん違うんですね？

伊藤：はい、全然違います。

張ったキャンバスに描いたその既製の手法しかなかったんです、最初は。でも、条件が違っているのに同じ方法で描こうとした私がおかしいので・・・条件が違ったらその条件に合わせてなにがなんでもやるべきではないか、やらなきゃウソじゃないか、という気持ちがどこかにあるので、いっぱい心配してくださっていろいろな方法を提案してくださるんですけども、私はなにがあたって生きていく、というそれを貫きたいという厚かましさでいます。枠にキャンバスを張るというのは、絵かきさんたちの長い経験をもとに作りあげられた1番最高の条件だと思います。それをこのこと後から描きはじめて私が抵抗するというか、無視して描こうなんていうのは、大体本当は大それたことだと思います。だけれども、そういう条件がなくても本当に描きたいならば、そして描くということが私の命にとって大事ならば、なんとかやってみたくて、ナイフを一振り振るたびに裏切られるんです。裏切られ裏切られる。キャンバスに裏切られ、絵具に裏切られ、ナイフに裏切られながら私は私が生きていくということをしたい。なんとかやりたいと、どっかで思っています。残念にも敗北しきるかもしれません。でも、その敗北の姿をさらけ出す。そういう・・・しげみさんに恥をかかせるようなことをあえてやっています。ごめんなさい。そういうことです。

高橋：いえいえ、私もこういう試みは初めてです。こういう環境で制作してみませんか？ と提案して、実現することは初めての経験なので、条件がいいと思える環境を整えることが、いい作品を生み出すことにはたして直結するののかというのは、毎日自問しながら二子さんの姿を拝見しています。この展示に関してもそうです。今までは八戸市美術館の中で行われてきましたけれども、今回は八戸の美術館よりは白くて高い壁があったから、こういうことをやってみたわけですけども・・・果たしてこれが伊藤二子を見せる上で正しいのかはどうかは分かりません。もしかしたら私が八戸市の美術館で感じた野生というか、作品がもっている力を引き出すことにはなっていないかもしれないなあ、という感じもしているわけで。提案した私も自信

があるわけではないのです。あの、今伊藤さんから「裏切られる」という言葉が出ましたが、「裏切られる」ということは、ある意味非常にいいこと・・・ではないでしょうか？伊藤さんにとっては。むしろ私はナイフでカキながら、「裏切れ、裏切れ」というふうに言っているような気がします。

伊藤： そうなんです。昔むかし、西陣織の職人さんが絹糸を染めるときに「染まらんように、染まらんように」と言って染めるということを教わりました。すんなり染まった染め物は美しくないそうです。染まらないのを何度も何度も色を潜らせて、何倍もの努力をして本当の色が出るのが本物の染めだということが・・・色んなこと忘れるのですがそれは深く私の中に留まっていて、「描けないぞ、描けないぞ、ああ描けない」というところから本物が生まれるのではないかと、一縷の望みに縋って描いています。それともうひとつ、いつもはこの壁にあるサイズの作品を3枚並べると精一杯の場所で描いています。それをあっちへ立て掛け、こっちへ立て掛け、私のいる場所を残してそのキャンバスを回しながら描いているという中で、この広い場所を設けてくださったということに無条件に飛びつっちゃったんです。嬉しくて！ その嬉しさを私自身が裏切ってはいけないし、キャンバスも裏切っちゃいけない、絵具も裏切っちゃいけない、その最初の思いも裏切ってはいけない、しげみさんも裏切りたくないし、そういうことで私は本当はできない、できないって毎日キャンバスを潰しているのですが、決して失望しているのではなくて本当はいっぱいやるぞっと思っただけです。ただ現在できないでいるということです。

高橋： はい。（4月）25日に伊藤さんに青森市にお入りいただいて、展覧会自体は29日に始まっていますけれども、その前に準備としてお入りになられてキャンバスを広げて、まず黒から塗るといいます。これまでも黒については幾度かお話されてきていますけれども、黒を今回も2回は塗っていますね。キャンバスは10mの長さなんです、10mに2回重ね塗りしていますよね。その黒から始めるということについてお話を少しいただければと思います。

伊藤： ただ塗っているだけなんです。黒の上に必ず、黒では終わらない何かを重ねて形を描いてきたのですが、黒の上に赤を塗るならば、最初から赤でもいいのではないかと、赤を塗ってみたい、白いキャンバスの上に白を塗ったこともある。いろんな色を塗りました。ところが黒を塗らないキャンバスではなぜか形が出てこないんです。で、それはなんだろうと。だから理屈が先ではなくて、生理的に黒を塗らなければ描けないという私はいったいなんなのか、そう思ったときにいろいろ理屈を考えたのです。考えて納得したのです。というのは、さっきしげみさんもおっしゃいましたが、母は自分の勝手に、出されたのではなくて、自分の意志で父のもとを去ったのです。その時私がお腹の中にいるということを知らずに、実家に帰ってきたそうです。帰ってから私がお腹にいるってことに気づいた。その時の母はどんなにか苦悩したのではないかと。私が生まれるまでの苦悩、生まれてからも苦悩したと思います。今のように簡単に処理できない時代、大正末期ですから。その時に母の苦悩というものを私は母のお腹の中にいる何か月もの間、生まれてからもずっと背負っているのではないかと、そういうはずだ。っていうふうにして、その黒い中で私を育ててくれた母の思いが私に作品を作らせているという、母の思いというものを私は受け継いでいるのだと、そう思うことにしたのです。そうしたらすごく納得いたしました。で、納得したもんだから口にもするようになりました。果たしてそれが本当かどうかは分かりません。そういう中で私は黒を描いています。黒をまず塗ります。あの辺にある白地のものもとにかく黒を塗るんです。黒を塗らなければ描けないのです。だから黒ではないに

しても、今描けないでいるということは黒いんです。その黒い中からなんか見つけなきゃいけないと思って、黒いから頑張れる気がします。頑張るという言葉を本当は嫌いなんですけれど、黒いことがあるから・・・白ばかりだったら成立しないでしょ。だからそういうものを踏まえたいなと思っているから黒を塗るし、それから黒にこだわるといえるのでしょうか。黒いものが見えているのでも、表面の黒の下には黒以外の何かがあるんです。そういうふうな私と黒との関係です。

高橋：黒というのは単純な黒ではなくて、いろんな光を含んだ黒だっというような言い方もされていたような気がします。黒というのが母親の苦悩の場所だったとすれば、それはイコール伊藤二子という生命が生まれる場所でもあったということで、生命を内包する黒といったような非常に深い黒で、伊藤さんの作品を輪切りにしたら、いろんな色の層がミルフィーユのように詰まっているというか、重なっているのではなかとはいえませんが、実際にそういったいろんなものが縋り交ぜになった黒ですね。

伊藤：私が生まれてくる原点に黒があったということ、私が黒だと決めてしまうことに対する後ろめたさもあるんです。っていうのは、そういう中で私は生まれて育ったのですが、なんて言うんでしょう・・・いっぱい幸せに育ったような気がします。みんなに可愛がられて、ちっちゃいころからいろんな方、家族だけじゃなくて、本当に可愛がられて大事にしてくださいました。そういう人に対して黒を使うっていうのは、罪悪ではないのかと思うくらい私は、そこにある伊藤吉太郎という祖父もそうですし、祖母にも、従兄姉たちにもほんとに可愛がってもらった。もちろん母からも。「二子ちゃんはお母さんと一卵性双生児だよね。」って何人かに言われました。それくらい母と私は密着してきて、あの・・・母を・・・今だから言えるけれども、随分反抗もしたし、我がままもした時代もありながら、やっぱり母っていっぱい大好きな人でした。そういう中で黒を使うなんていうのは言語道断だと思いますけれども、言わないだけに母の苦悩っていうのは黒だったのではないか。その母、それからそういう中で私をいとおしんでくれた周りのたくさんの人たちに対して、私は黒を忘れてはならない、黒を大事にしなきゃいけないという、そういう思いもどこかにあります。いっぱい幸せな中で黒を忘れてはならない、そう思っています。

高橋：今回真ん中の部屋で、資料関係を展示していますが、伊藤さんは展示している過去の作品に対してはそんなに思い入れはないけれども、真ん中の部屋に入ると本当に思いが詰まっているというふうにおっしゃっていて、伊藤二子さんの小さい頃のお写真が貼られたアルバムですとか、おじい様のお宅にあった大事な屏風でありますとか、伊吉商店の名前が入った額、いろんな物1つ1つが人生の1つの大事な時を想起させるものであるというお話をうかがっております。今おっしゃったように、黒ではなくて薔薇色の少女時代でしたね。

伊藤：そう思ってます。

高橋：あの時代の方で小さい頃のお写真が、あんなにたくさん残っているっていう方はそういらっしやらないと思います。それだけやっぱり大事にされたんだなあっていうのは本当に感じます。

伊藤：本当にありがとうございます。薔薇色でした。私は母がどうして離婚したのか知りません。母も全然言わな

いで亡くなりました。だけれども祖父から受けた、5年11カ月私にとって祖父っていうのは、すごい背筋の元のような生きる原点のようなものを、私に植え付けてくれたと思います。母は語らなかつたけれども、祖父の日常に私を合わせるために、たまに田舎へ帰ってくる孫ではなくて、朝夕祖父の咳払いで目が覚める、おやすみなさいをしに行く時の祖父、いろんな時の祖父を私に味あわせるというのかしら・・・命の元にするために母は帰ってきたのではないかと思うのです。母の離婚の原因をそういうふうにするにしています。祖父が私の生きるもとを作ってくれたと思っています。いわば、子連れの出戻りである母、その子なのに誰にいじめられるということもなく、みんなに可愛がられた、その果ての今の私です。

高橋：伊藤吉太郎さんの影響というか、二子さんは幼かったわけですがけれども、幼いなりにものすごく大きな存在として、未だに心の中に残ってらっしゃる・・・非常に高い志を持っていた方であったということをお伺いしております、あの伊吉巡回文庫なんかもそうですけれども、当時本に接する機会が少ない方々に、私財を投じて巡回文庫を設置して、南部の広い地域で本に触れる機会を多くの人に作るというそういう行いからも分かるように、本当に平等を旨とするような方だったと思うんですが、その頃の思い出とかは・・・？

伊藤：昭和8年三陸の大津波の前に昭和6年にも大地震があったんです。3月の初めだったと思います。学校へ入る前でした。その時に、蔵の壁が落ちて母がそれを知ってあわてて、私の手をひいて祖父の部屋の縁側から障子を開けて、八戸弁です。「蔵の壁落ちあんした。」そしたら祖父が「それがどうした。」商家で蔵の壁が落ちるっていうのは大変な事だったんですけれども、その後「怪我人はないのか。」って。私の耳にその祖父の声が未だに響いているように重い言葉でした。蔵の壁より人の・・・怪我人はないのかっていうのは、働いている従業員たちのことを言っているのだったと思います。今のように除雪がないから、3月の初めですと八戸の場合は雪は少ないけれども、表面がカチンカチンに凍るんです。通りが滑るものですから鶴嘴でガチンガチン、春になると氷を砕くんですけれども、裏の脇の道を砕いていたそういう人たちのことを案じていたのだと思います。後で母が言っていたんですが、それを砕いていた店員が真っ青な顔でちゃんと生きていたって。だから母は蔵の壁のことしか気がつかなかつたけれども、祖父はその従業員の安否をまず重んじた。それはずーっと私の中に残っていて、なにがあってもやっぱり人の命ということを大事にする。特に、働いてくれる人たちへの思いっていうのは強烈なものがございまして、私が育つ時なにが一番ダブーか、やってはいけない事かと言うと、私の立場として、従業員たち・・・若い者や女中たちに対してひどい仕打ち、いじめとかそういうことをすることは、なによりもやってはいけないことでした。私が女学校2年生の春に新しい女中が来て、5月頃どこか家中で遊びに行くことになりまして、3月に卒業して4月に来たばかりの新しいねえやだったものですから、古い着物しかなかつたんです。そしたら母が、その前の年に私が学校で縫った、私にすればキラキラするしぼりの羽織があつたんです。紫と黄色とグリーンと、牡丹色の素敵な羽織で、いつこれを着せてもらえるのかなあと思ってる羽織が、躰糸がかかったままタンスにあつたんです。「二子ちゃんあれねえやに貸しなさい。」と言ったんです。その時のもう悔しいこと残念だったこと。でも今と違って母に口答えとか抵抗はできなかつたので、それを着せたんです。私は女学校の制服を着て行きました。ねえやは袂をひらひらさせて嬉しそうに走り回っている。私はもう複雑な気持ちで、私がこの後着たならば、「二子ちゃんねえやから借りていると思うべなあ・・・」と悔しくて辛かった思い出があります。今から5～6年前でしょうか。そのもっと前にいたねえやが90いくつで私に電話をかけて寄こしたんです。「あんださんのお母さんに、おら良くしてもらいあんした。」南部弁でお分かりになるかしら？私の母に良くしてもらったっ

て言って。で、私は、ねえやにこうこうと「羽織を着せて悔しかったんだ。」で言ったら、「そうですがすんだ。あんださんのお母さんがそういう人でごあんしたんだ。」って言ってくれたんです。私はその時、すーっと胸のつかえが取れるような気がして、そういう人たちが母を大事にして、母のそういう好意をちゃんと支持してきてくれたということ。私はあの時、文句を言わないでそのねえやに着せてあげて良かったなあと思いました。そういう事がいっぱいいっぱいいっぱい、私の中に今はたったそんなことだけですけれども、数えきれない色んなことが、私の中にいっぱい詰まっているような気がします。全部言おうと思ったら今日中に終わらないくらいいっぱいあります。

高橋：若い世代の方は「ねえや」っていうとお姉さんかと思うのですが、そうではなくて、使用人、仕えている女性の方を当時「ねえや」というふうに呼んでいたんですね。そういう使用人に対しても本当に差別なく接するような気風が、叩きこまれたって感じですね。

伊藤：はい。その当時は昭和初期です、私が育ったのは。旦那様が一番上座で座布団で高いお膳で食事をして、長男はやや低いお膳で、それから女房子供は座布団なしで、使用人は板の間でっていう生活でおかずも全然違ったそうです。私の家では一切その差別はなかったんです。それをいうと友達に「そしたら話なかべ。」って、みんな上下の差があったんだよって言うんですけども、ほんっとになかったんです。だからそういうものだと思って暮らしてきましたし、よそへ行くと小僧さんや女中に対して、ものすごい差別的な言葉を友達たちが言う、八戸弁で言うと、ざわめぐんです。そういうふうな、なんでうちだけ女中は私と対等なのかしらって言うくらい一緒でした。それと八戸で「てんだいっこ」って言うんですけど、小僧たちにお休みを与えたのは、うちが一番初め。藪入しかお休みが無かったのに、ひと月に1回お休みを出すようになったのは、それから給料を出したのはおらほが初めてだって。まるで詩の文句のように言われて、私はこの耳にちゃんとかう掴まえてきました。そのひとつの例として、隣にも商家が並んでいた地域なものですから、お隣の従業員が・・・うちで給料を出したことを知って、そこの御主人へ、「隣で給料を出したそうだから、うちでも給料くれ。」と言ったら、御主人が「おらほでは先祖代々、てんだいっこさ給料けだ覚えはない。そしたらにほしかったら隣さ行け。」って言われたそうです。その時代っていうのはなんて言うんでしょう、律儀で、御主人がその小僧を連れてうちへ見えたんです。「うちの小僧は給料ほしいって言ったけれども、うちでは給料出すわけにいかない。よかったらお宅で使ってくれ。」そしてうちの小僧さんになりました。その人は戦争中兵隊に行き、南方から無事に帰ってきて、「一番先に来あんした。」って私の母のところへ牛肉を買って、お土産に持って来たことをありありと覚えてます。そういうことは私の肥やしになっていると思います。

高橋：そうですね。そういう環境っていうのが、二子さんの人格を形成していく上で、決定的な役割を果たしているんだと思います。で、そのことは二子さんが小中野小学校の先生になられた時に、おそらく生徒さんたちに伝えられていて、今回展覧会をやっておりましても、ほとんど毎日のように教え子さんがいらっしやって、今日も会場にお出でになりますけれども、やっぱり先生としての印象がすごく強烈だったようで、未だに交流が続いているっていうのはその証、いかに深かったかということの証かと思うんですけども・・・

伊藤：初日に来たのは本人じゃなくて、その生徒が亡くなって、その奥さんが来てくれたんです。八戸から。それからもう1人、もう来たくて来たくてやっとな今日を待ってて来たんだって言ってきたのは、教員になりたて、

産休の先生の代わりに、1カ月だけ勤務した時の生徒も来てくれたんです。今日も東京から、北海道から生徒が来てくれています。私は何をしたってことではないのですが、そしてなんの力もなかったんです、教員として。ただ思うことは、なんにも出来なかったけれど精一杯に可愛がったな、ということだけしか覚えてないくらい可愛いがりました。憎たらしい子も合わせて可愛かったです。学年末がきて生徒を手放さなければならぬ時は、「ああ親のところに帰さなければならぬのか。やっぱり親の子だったな」って思うくらい生徒が大事で生徒が可愛かった。ただそれだけです。今も付き合っているたくさんの子供達に「今まで騙されてきたのに、まあだ騙されたくて来るの？」って言うんですけども、騙すって言葉を「先生、そういうことは言わないで。」って言うんです。ですけども誰を騙したかという、本当は生徒じゃなくて私を騙して来たんです。やれることだけをやるのだったら騙さなくてもいいんです。やっている以上のことをしようと思うと、ものすごく不安で、「大丈夫だぞ！よおーし！」って気合を入れて私を騙して、ついでに生徒を騙して来ただけのことです。その騙しようがどんなにまともな騙し方をしたのか、出来なかったのか、いまだに忸怩たるものがありますが、騙し通してきたような気がします。今も騙されている人がたくさん来ています。

高橋：先ほど、幸せな少女時代、幸せな時代にありながらも黒を思うっていうか、黒のことを常に心に留めているってことが大事なんだということをおっしゃっていましたが、私はその、二子さんが制作にむかうときに、自分をすごく問い詰めますよね？その自分を問い続ける気力っていうか・・・このお年になっても、って言い方はたいへん失礼ですが、自分を問い続けることはなかなかできないことだと思うんです。人は年を取れば取るほど自分を認めたがるけれども、問い詰め続けるってことは非常に気力のいることだと思うんですけども、それをさせているものはなんなのでしょうかね？

伊藤：なんなんでしょう。そういうふうにお聞きになると答えようがないのですが、あの・・・朝の食事に味噌汁を食べるように、温かいご飯を食べるように、当たり前のような気がするんです。それ以外に私は持ってない。それが理屈ではなくて、そこへいつも戻らなければいけない、そこから立ち上がらなければならぬっていう気はどっかに・・・これは・・・なんなんでしょう。そういうのを私いつでも抱えているような気がします。

高橋：伊藤さんが制作にあたっての言葉を残している中で、「きれいごとではない美を求める」とか、安住し続けることを戒めるっていうか、こんなことも仰っていますね。「キャンバスに形を描く、キャンバスに描かれれば形はその時死者となる。歯を食いしばり新しい墓標を削る」と。形になった、と満足する自分をすかさず打ち壊すっていうか。形の家来になるな、ということも口にしていらっしゃいます。そういう精神が、表現をし続けさせているのではないかと思うんですが、どうやったらその精神を持続できるのかっていう・・・

伊藤：正確な答えはないのですが、自然にそうなっているだけなんです。けれどもやっぱり・・・そうですね、今そういうふうにかきつけていただいているのは、本当は私のような生まれようをして、私のような育ちをした人間にとって、薔薇色っていうことは本当はありえないんじゃないかと思うんです。ところが薔薇色にさせてくれたいろんな人の愛情を思うとき、それに乗っかってばかりいたんじゃないかというか、本当の幸せはないような気がするというところから、いつもその辛くあるべき人生の元というものを年中引き戻して、自分で確認するということをしなきゃならないんじゃないか。それからさっきおっしゃった、形はそ

のとき墓標になる、墓標にしなければ次はにせものの形にしかならない、崩すからこそ新しい形が生まれるんじゃないか。何かに・・・何かに何かを被せて、被せた上にまた次を乗っけていくということではいけないのではないか、ひとつひとつその都度新しく生んでいくのでなければ、命は・・・命ではないような、そういうふうな私のつたない精神構造というのかしら。そういうことになっちゃってるだけのことです。

高橋：伊藤さんの時代に生まれて、本当の幸せってないんじゃないかというふうな・・・

伊藤：でもないんですけどもね。

高橋：薔薇色ってことはありえないんじゃないか、というか・・・

伊藤：あるんだけども、あるからこそ原点を忘れてはいけないということです。

高橋：ええそうですね。私は今回あえて展示資料の中に、伊藤二子さんが若い頃、原水爆禁止の平和運動に参加されていた頃の新聞記事を入れさせていただきました。若い頃かなり活発に、禁止運動をされていらっしやるので、今回の地震の後の状況に関して、今、半世紀たってこういう状況になって、どういう思いでしょうか、というふうにこの前も尋ねざるをえなかったんですけども・・・

伊藤：あの、あれは本当に今度の福島原発っていうのは、私たち1人1人の怠慢によるものではないかと思ったんです。私は原発ではなくて、戦争というものを若い時代に体験した1人として、どうして1人1人が戦争に抵抗しなかったかっていうことを、戦争が終わった直後から問い詰めて反省をし、そういう時代をもう一度甦らせてはいけないと、芯コでちゃんと留めてきたはずなのに、しかも原水禁運動に一生懸命取り組んできていながら、危ないということをどっかで分かっていたいながら、どっかで感じていながら、最悪の事態が発生しなければ、直面しなければ気がつかなかったのか。豊かさ、便利さに慣れて、耳を塞いで妥協してきたのではないか、誰が起こしたのでもない、ひとりひとりが巻き込まれたという言い方は非常に無責任です。命を落とすくらい頑張ってきたのに、なぜ命を落とさずに、こんなに多くの人々が危険にさらされることになる道を歩くことに加担してきたのか、自分のこととして、切ないものがあります。 やっちゃった！！
やってしまったという、積極的に戦争を推進したのではないが、ずるずると無関心な共謀者のひとりになりさがったのかという気持ちです。原発への反対の声がもっと強かったならば、エネルギーの元を原子力に頼らない研究が進んだのではないかと、とも思います。戦争を始めた者を私は、若いとき糾弾した。その糾弾されるべき人間になり下がったという思いがあります。

高橋：やっぱりそこが黒・・・ですね。

伊藤：黒ですね。黒では描ききれない真っ黒黒ですよ。私の命の汚点です。

高橋：ただそれは伊藤二子さんだけの問題ではなくて、私はこの企画をやるに至ったのは、地震の影響っていうのはやっぱり大きかったんですけども、自分を突き動かしたものの1つは地震だったわけだけども、その

後でやっぱり感じたのは、日常をどういうふうに1人1人が自覚を持って暮らしていかなくちゃいけないの
かっていうこと、それは二子さんが描くときに、黒のことを常に心に留めるように、やっぱり我々1人1人が、
その黒のことを忘れてはいけないのではないかな、と。そのことを展覧会を通して言えたら、と思って開催
したんです。

伊藤：そうおっしゃっていただくと、簡単な言葉でいえば甘っちょろくなるんですけど、救われる思いがして。巨
大な悪い奴が見たら悶絶するような絵を描きたいと思うんです。それでいて同じ絵をまっとうに生きている
人が見た時は力にしてくれるような。そういうふうなのが私の願いです。やれているかやれていないかは別
ですが、そう思っています。そうしたらそれを聞いたある人が、「ああ伊藤さんの絵を掛けておけば、泥棒は
おっかなくて入れないってことですか？」って言われちゃって（笑）「そうよ！」って、冗談ですけどもそ
ういうふうなちょっと次元が違うんですが、そういうことが割と最近もあったりしました。で、そういうふ
うな悪い奴らは悶絶してくれー！っというような絵を描きたいと思っています。描けないから言えるんです、
描ければ言えませんがそんなこと（笑）

高橋：ありがとうございます。そろそろ時間もせまってきましたけれども、せっかくの機会ですので会場にいらっ
しゃる方で伊藤二子さんに直接お話しをお聞きしたいことがあれば、是非問いかけていただきたいと思いま
すが、挙手でお願いいたします。

[以下質疑応答省略]